

「しっこさ」

(ルカによる福音書 18:1-8)

先週の福音では、信仰とは、物事の先に働かれる神を見る目であることが示されました。その目をもってこの世界を見る信仰者は、この世界に実際に働かれている神を見、神とともに生きることになります。神との交わりに生きるなら、そこにおられる神との会話としての「祈り」が不可欠になります。信仰者の特徴は「祈り」にあるのです。

しかし、祈り続けることは難しい。日々の煩わしさのなかで、目が曇り、神を見失ってしまったり、自分の祈りが聴かれているのかという疑いから、祈ることをやめ、神との交わりから離れてしまうのです。そういう人間のことを主イエスはよくご存知だからこそ、「気を落とさずに絶えず祈らなければならぬ」ことを教えてくださいました。

自分を守るもの、保護するものが何もない、極めて弱い立場を象徴するやもめ。その軽んじられた命の唯一の武器は、「しっこさ」でした。彼女は「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」のところへ通い続け、訴え続けます。そんな裁判官であっても、しっこいやもめには目を向けざるを得ない。まして神は、しっこく祈る者から目を背けるはずがない。神は必ず、祈りを聴いてくださる。だから落胆せず祈り続けなさい、と主イエスは言われるのです。

今日の旧約聖書も同様です。食い下がるヤコブを主は祝福され、イスラエルという新しい名を授け、新たな命を与えられます。もちろん信仰も、希望も、すべてわたしたちの行いによって獲得されるものではありません。わたしたちの目が開かれるのは、神がわたしたちとともにい続けてくださるからです。だからわたしたちはいつでも、信仰の目が開かれるなら、神を見出すことができるし、祈ることができるのです。

いつもわたしたちとともにおられる神は、必ずわたしたちの祈りを聴いてくださる。神がその祈りにどのように応えてくださるかは分かりません。しっこさだけが武器であったやもめのように、しっこく祈り続け、神との交わりに身を置き続けることでしか、それは分からないのです。しかし神は必ず、わたしたちの思いを遥かに超えて、祈りに応えてくださる。気を落とさず祈り続け、神と共にある歩み、信仰の歩みを続けて行きましょう。